The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	不適応的な自己愛に関する研究
Author(s)	中村, 晃
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44822
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【17】

氏　　名	中村　晃（なかむら　あきら）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　18336　号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	**不適応的な自己愛に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　倉光　修 （副査） 教　授　老松　克博　　教　授　藤田　綾子　　学外教授　三木　善彦

論文内容の要旨

「自己愛」とは自分を愛することであるが、自分自身を大切に思うような健全・適応的な側面と、いわゆるナルシストに見られるように、自己顕示的で他者への配慮が欠けるような不健全・不適応的な側面の両方を「自己愛」には含んでいるため、これまでの自己愛の議論は混乱が大きかったと考えられる。そこで本研究では、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」に焦点を当て、これが不適応的な自己愛の問題の本質であることを検討した。不適応的な自己愛傾向の表れ方は、大きく分けて「誇大型」と「過敏型」の2つがあることが示唆されている。現在最もよく使われている自己愛の尺度は、Raskin & Hall の開発した自己愛人格目録（NPI）であるが、NPI は主に「誇大型」の自己愛を測定していることが指摘されている。これに対し、「過敏型」の自己愛を測定する試みも現在までなされてきているが、いずれの研究も「誇大型」と「過敏型」の自己愛傾向を別々の特性として測定している。しかし、どちらのタイプも自己愛の問題としてみるのなら、両者に共通した問題を考えないと、「自己愛の問題」とはいえないであろう。そこで、本研究では NPI から「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」を抽出し、それが、「誇大型」と「過敏型」の共通の不適応的な側面として捉えることができるかを検討することを目的とした。さらに、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」が自己概念や対人関係とどのような関係にあるかを検討することを目的とした。

まず NPI の構造を検討するため因子分析したところ、「注目・賞賛願望」「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」の4つの因子から構成されることが確認され、それぞれ因子負荷量の高い項目を合計して下位尺度化した（研究1）。このうち、下位尺度の内容、顕示的自己を測定する「PA」と理想化を測定する「PGD」との関連（研究2）、および SCT による記述分析の結果から（研究3）、「注目・賞賛願望」が本研究のテーマである「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」を測定する尺度として適当であることが示唆された。さらにこの「注目・賞賛願望」が「誇大型」と「過敏型」の両方の自己愛と関係することが示されたため、以下、「注目・賞賛願望」を中心に、検討を行った。

次に、NPI と自己概念との関連を検討した。NPI の各下位尺度と自尊感情との関連を検討したところ（研究4）、「注目・賞賛願望」と自尊感情は負の相関が見られたが、それ以外の3つの下位尺度とは正の相関が見られたことから、「注自・賞賛願望」は不適応性と関連し、それ以外の3つの下位尺度は適応性と関連することが示唆された。また、自尊感情と自尊感情の安定性、および自己愛との関連を検討すると、NPI の下位尺度間のバランスを考える必要

性が示唆されたため、「注目・賞賛願望」得点と、その他の３つの下位尺度を足した「肯定的自己愛」の得点のバランスから、３つの群に分類して検討した。その結果、①の注目賞賛願望優位群では、PGD が高く自尊感情が低いことから、「過敏型」に近い可能性が示唆された。②は中間群であり、③の肯定的自己愛優位群では、PGD が低く自尊感情が高いことから、最も健康的で適応性が高いことが示唆された。

NPI と性役割、理想自己と現実自己の差についての検討したところ（研究５）、「注目・賞賛願望」が高いと、理想自己として男性性を重視するが、現実自己では男性性が低い傾向が示された。また、「注目・賞賛願望」が高いと、男性性と人間性の「社会的望ましさと現実自己の差異」および「理想自己と現実自己の差異」のいずれも大きいが、他の３つの下位尺度が高いとどちらの差異も小さいことから、「注目・賞賛願望」は不適応性と関連し、それ以外の３つの下位尺度は適応性と関連することが示唆された。また、研究４と同様に自己愛のタイプ別検討では、①の注目賞賛優位群では男性性と人間性の「社会的望ましさと現実自己の差異」と、「理想自己と現実自己の差異」のどちらも大きい傾向が見られたが、③の肯定的自己愛優位群はどちらも小さいことから、①は不適応性が高い傾向があるが、③は適応性が高いことが示唆された。

自己概念だけでなく、対人関係との関連を検討する必要性が示唆されたため、次に自己愛傾向と対人関係の関連を検討した。NPI と社会的スキル、孤独感との関連を検討したところ（研究６）、「注目・賞賛願望」が高いと、社会的スキルが低く、孤独感が高いが、他の３つの下位尺度では、社会的スキルと負の相関が見られたことから、対人関係において、「注目・賞賛願望」は不適応性と関連し、それ以外の３つの下位尺度は適応性と関連することが示唆された。NPI と共感性、依存性、感謝傾向との関連を検討したところ（研究７）、「感情的被影響性」に関しては、「注目・賞賛願望」とは正の相関を示すが、他の３つの下位尺度では、負の相関が見られたため、「注目・賞賛願望」が高いと他者からの影響で動揺しやすい傾向が示唆された。また、道具的依存性および情動的依存性も、「注目・賞賛願望」とはどちらも正の相関だが、他の３つの下位尺度では負の相関が見られたが、一方感謝傾向に関しては、「注目・賞賛願望」では相関が見られないが、他の３つの下位尺度では、正の相関が見られたため、「注目・賞賛願望」が高いと、他者に依存するにもかかわらず、それが感謝に結びつかない傾向が示された。NPI と対人恐怖心性の関係を検討したところ（研究８）、対人恐怖心性と「注目・賞賛願望」は正の相関が見られたが、他の３つの下位尺度では、負の相関が見られたため、「注目・賞賛願望」は対人関係における不適応性と関連することが示唆された。また、自己愛のタイプ別に検討したところ、①の注目賞賛願望優位群は、社会的スキルが低く、孤独感が強い傾向が見られ、さらに感情的被影響性が高いことから、他者に影響されやすいこと、および情動的依存が高く、感情的に他者に頼る傾向が示され、対人関係における不適応性が強いタイプであることが示された。また、対人恐怖心性が最も高いことから、①が「過敏型」に近いタイプであることが示唆された。一方、③の肯定的自己愛優位群は、社会的スキルが高く孤独感が弱い傾向が見られ、さらに依存性が低いにも関わらず、感謝傾向が高く、また対人恐怖心性が最も低いため、対人関係において最も適応的であることが示唆された。

さらに、適応的な自己愛（セルフラブ）と不適応的な自己愛との関連を考察するため、自己愛と基本的信頼感、自意識の関連を検討したところ（研究９）、「注目・賞賛願望」と基本的信頼感は負の相関が見られたが、他の３つの下位尺度では、正の相関が見られたことから、基本的信頼感（健康な自己愛）が形成できなかったことが、「注目・賞賛願望」の高さにつながる可能性が示唆された。また、公的自意識とは「注目・賞賛願望」にのみ正の相関が見られることから、「注目・賞賛願望」が高いと外から見られる自分について意識が向きやすい傾向が見られることが示された。また、自己愛のタイプ別に検討したところ、①の注目賞賛優位群は基本的信頼感が最も低く、公的自意識が高いが、③の肯定的自己愛優位群は基本的信頼感が最も高く、公的自意識が最も低いことが示された。そのため、①は健全な自己愛が低いため、他者からの評価を気にする傾向があり、③は健全な自己愛が形成されているため、自意識が低いことが示唆された。

以上の結果から、以下のような結論が導き出された。１.「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」が NPI の「注目・賞賛願望」で捉えることができた、２.「注目・賞賛願望」の高さは自己概念や、対人関係に関する不適応性につながる、３.「注目・賞賛願望」が他の NPI 下位尺度に比較して高いと、「過敏型」に相当する（タイプ①）４.「誇大型」の自己愛傾向にも、「注目・賞賛願望」が関連する、５.「誇大型」と「過敏型」に共通して「注目・賞賛願望」の高さがある、６.「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」は健全な自己愛の

欠如によることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近年、誇大型と過敏型があるとされてきた不適応的自己愛について、両型に共通する心性を「他者からの評価への関心の集中、こだわり」と規定し、それがNPIという質問紙の下位因子の一つである「注目・賞賛願望」で捉えられること、しかもその因子得点が他の３種の因子得点よりも高い場合には、過敏型として捉えうることを、９つに及ぶ関連研究を行った結果から提起したものである。NPIは、従来、誇大型の自己愛のみを測定していると考えられてきたので、この知見にはオリジナリティが認められる。また、一連の研究結果から臨床的な示唆も得られた。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の学位にふさわしいものと判定した。